

## ルソー『エミール』(1762) 読解のための序説 —一人食い人種と幼稚園をつなぐもの—

### Introduction for Reading of Rousseau's "Emile" (1762) —What Connects Cannibalism and Kindergarten—

富 田 晃\*

Akira TOMITA\*

#### 要 旨

ルソーの幼児教育思想の主旨とされる「人は子どもというものを知らない」ではじまる『エミール』のなかの有名な一文の続きは、原語の字義に即して和訳すれば「かれらは子どものうちに人間をもとめ、人間になるまえに子どもがどういふものであるかを考えない」となる。つまり、ルソーは、「子ども」を「人間」になる前の存在とし、「子ども」の反対概念を「大人」ではなく「人間」にしていたのだ。ルソーによって「発見」されたという「子ども」とは、「子ども」と「自然」を一つのものとしてとらえ、それを「人間」や「文明」と対比させることによって導き出された概念である。ルソーは「すべての現存の諸民族のなかで今日まで自然状態をもっともよく保存している民族であるカライブ人」という。ルソーの「子どもの発見」を考察するためには、ルソーが生きた18世紀中頃のフランスに至る「人食い人種・カライブ (カニバル)」をめぐる認識の経緯をたどる必要がある。

キーワード：ルソー 子どもの発見 近代教育思想の成立 常識に配慮した意識 カライブ (カニバル)

#### 〇はじめに

人間は、昆虫のように変態しない。人間の生涯における生物としての変化は、誕生から成人し老いて死に至るまで、切れ目のない連続したものである。一方、人間は、本来は分けられていないことであっても、それを分けることによって、物事を理解したり、利用したりする。イスラエルの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリは、人間の特徴を、生物のなかで人間だけが「虚構」をつくり、それを共有する「認知革命」を経たことだという。(ハラリ, 2016(2011))人間が生み出した「虚構」のなかでも特に、約7万年前に生まれた「言語」と約5千年前に生まれた「文字」は、その後の人間の在り様に大きな影響を与えた。

生物としては切れ目のない人間の生涯を、「子ども」と「大人」に分けることがある。日本の戦国時代に発達した元服のように、戦争を前提においた社会では、戦闘集団に加入するための通過儀礼を発達させて、「子

ども」と「大人」を分けた。現代においては、選挙、徴税、教育、労働、刑罰といった近代社会の法や制度が「子ども」と「大人」を分けている。

18世紀フランス語圏の思想家ジャン・ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) は、時に「子どもの発見者」と呼ばれる。ルソーの時代、ヨーロッパ・キリスト教世界における主たる通過儀礼は洗礼と結婚であり、「子ども」と「大人」の境界はあいまいとしていた。そして、「子ども」は、「小さな大人」とみなされ、身分や職業に応じて、大人がもつべきとされることをできるだけ早く子どもに身に付けさせることが「良い教育」とされていた。

ルソーは、49才の頃、自らの教育思想を架空の少年の成長に託して描いた『エミール』(1762) を出版した。ルソーの教育論の最大の革新性は、それまでの教育論が特定の身分や職業のための教育であったのに対し、教育の対象を身分や職業にかかわらず「人間」にしたことである。このことが、ルソーが今日、「近

\* 弘前大学教育学部美術教育講座  
Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

代教育思想の祖」と呼ばれるゆえんである。ルソーは「人間よ、人間的であれ」（ルソー, 1962 (1762) p.101) といつて、「人間が人間的であること」の大切さを説いた。

「人間」と「社会」について考えつづけたルソーの思想は、『学問芸術論』（1750）、『人間不平等起源論』（1755）、『社会契約論』（1762）、『エミール』（1762）などの著作に結実して、現在につづく「国民国家」と「近代教育」の成立の原動力になった。

ルソーの教育論のなかでも、特に後世に影響を与えたのが、幼児教育においてである。ルソーは『エミール』を通じて「子どもとは、子ども固有の心と体を持った存在であり、子どもは子どもとして充実させることが大切だ」と説いた。ルソーは、幼児教育のあり方として、人間が生まれながらに持つ「自然」を尊重した「自然の教育」や、教育を急がない「消極的教育」を提唱した。こうしたルソーの幼児教育の思想が、後のペスタロッチ（1746-1827）やフレーベル（1782-1852）らに引き継がれ、子どもが安全かつ自由に遊ぶことができる場としての「幼稚園」（kindergarten）の成立を導いた。

#### ○常識に配慮した意識

日本における『エミール』の定本の一つになっている『エミール』岩波文庫版（今野一雄訳）（上 1962, 中 1963, 下 1964）をみよ。下記が、ルソーの「子どもの発見」の主旨とされる『エミール』の「序」の有名な一文である。

人は子どもというものを知らない。子どもについてまちがった観念をもっているのよ、議論を進めれば進めるほど迷路には入りこむ。このうえなく賢明な人々でさえ、大人（homme）が知らなければならないことに熱中して、子どもにはなにが学べるかを考えない。かれらは子どものうちに大人（homme）をもとめ大人（homme）になるまえに子どもがどういうものであるかを考えない。（ルソー, 1962 (1762) p. 18)

いかに多くの人がこの文を読み、ルソーの真意を掴もうとしてきたのだから。しかしである。この文には、ルソーの真意から離れた意識が含まれている。フランス語の homme の字義は「人間」または「男」である。日本語で「男になる」が文脈によっては「大人になる」の意味をもつことがあるように homme が「大人」を

意味することもあるが、それはあくまで文脈上のことであつて、字義ではない。

ルソーが「個人の成長」を構想した『エミール』（1762）は、その7年前にルソーが「人間の歴史」を構想した『人間不平等起源論』（1755）の続編と呼べるものである。『人間不平等起源論』と『エミール』には homme（人間）、naturel（自然）、enfant/enfance（子ども／子ども期）、sauvage（野生／未開）といった共通の頻出用語がある。各用語の使用回数は『人間不平等起源論』では、homme が 370 回、naturel が 85 回、enfant/enfance が 60 回、sauvage が 71 回であり、『エミール』では、homme が 1360 回、naturel が 221 回、enfant/enfance が 921 回、sauvage が 30 回である。

『エミール』岩波文庫版（1962, 1963, 1964）では、原著における homme の大半が「人間」と訳されている。また homme naturel が「自然人」、autre homme が「他人」と訳されているように「○○人」と訳されていることもある。一方 homme が「大人」と訳されている箇所も少なからずある。homme が「人間」と訳されているところは、例えば以下である。

- ・あらゆる有用なことのなかでもいちばん有用なこと、つまり人間をつくる技術はまだ忘れられている。（ルソー, 1962 (1762) p. 18)
- ・わたしとしては、人間が生まれるあらゆるところで、わたしの提案を人間にたいして行えばそれでいい。（ibid. p. 21)
- ・万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手につるとすべてが悪くなる。（ibid. p. 23)
- ・植物は栽培によってつくられ、人間は教育によってつくられる。（ibid. p. 24)
- ・この発展をいかに利用すべきかを教えるのは人間の教育である。（ibid. p. 24)
- ・植物がさらに伸びていくと、その伸びかたはふたたび鉛直になる。人間の傾向も同じことだ。（ibid. p. 25)
- ・外国人はたんなる人間にすぎない。（ibid. p. 26)

・人間の教育は、誕生とともに始まる。(ibid. p. 71)

「人間 (homme) が生まれるあらゆるところ」や「人間 (homme) の教育は、誕生とともに始まる」からもわかるように、ここでの homme は、いずれも「子ども」を含んだ「人間」を示している。そして、この場合の homme に「大人」という意味がないことは、上記の「人間」を「大人」に置き換えた「大人が生まれるあらゆるところ」や「外国人はたんなる大人にすぎない」では、意味をなさないことから理解できる。

一方, homme が「大人」と訳された箇所がある。「大人」と訳されている箇所の原語には homme のほかに grand「大きい」や viril「壮年」もあるが、「大人」と訳された grand はあまりなく、その場合は、精神的ではなく、身体的、年齢的な「大人」を意味している。そして, viril が「大人」と訳されているのは一ヶ所である。「大人」と訳された箇所のほとんどの原語が homme である。

「大人」と訳された homme の近くには、その対比としての「子ども」(enfant) がある。一般に「大人」という概念は、「人間」の二分法における「子ども」の反対概念として使われる。だから訳者は、「子ども」(enfant) の対比として使用された homme を「大人」と訳出したのだ。これは字義ではなく、「子ども」の反対概念を「大人」とする「常識に配慮した意識」である。この「子ども」の反対概念として使われた homme を「大人」とする「常識に配慮した意識」は、例えば、先の「人は子どもというものを知らない」で始まる部分でみると、戸部松実訳(中央公論社,1966)、長尾十三二・梅根悟・勝田守一訳(明治図書出版,1967)、平岡昇訳(河出書房,1969)、樋口謹一訳(白水社,1982)、永杉喜輔・押村襄・宮本文好・永杉喜輔訳(玉川大学出版部,1982)といった他の翻訳書においても共通している。

#### ○ルソーの真意にたちもどる

「大人」と訳された homme を、他の homme と同様に「人間」と訳すことによって、ルソーが記した原文をより忠実に理解することができる。『エミール』岩波文庫版における homme が「大人」と訳されていた主だった箇所を「人間」と並置して記すと次のようになる。

・かれらは子どものうちに<大人/人間> (homme)

をもとめ、<大人/人間> (homme) になるまえに子どもがどういうものであるかを考えない。(ルソー, 1962 (1762) p. 18)

・人は子どもの身をまもることばかり考えているが、それでは十分でない。<大人/人間>(homme) になったとき (ルソー, 1962 (1762) p. 33)

・弱い子ども時代をいつまでもつづけさせて<大人/人間> (homme) になったときに苦勞させるのは (ibid. p. 41)

・子どもは<大人/人間> (homme) が耐えられないような変化にも耐える。(ibid. p. 43)

・この<大人/人間> (homme) と子どもともつかないものは、完全に無能な人間であるにちがいない。(ibid. p. 69)

・慎重に、すこしずつ順を追ってやれば、<大人/人間> (homme) でも子どもでもあらゆることにたいして大胆にすることができる。(ibid. p. 75)

・<大人/人間> (homme) にくらべたばあいの子どもの弱さ (ibid. p. 112)

・だから<大人/人間> (homme) にはいっそう多くの意志があり、子どもはいっそう多くの気まぐれを起こすことになる。(ibid. p. 112)

・寓話は<大人/人間> (homme) を教えることはできるが、子どもにはなまの真実を語らなければならない。(ibid. p. 173)

・子どもは<大人/人間> (homme) より小さい。子どもは<大人/人間> (homme) の体力も理性ももっていない。(ibid. p. 218)

上記の homme を「人間」としたものが、ルソーの真意により近い和訳となる。ここに挙げた「この人間 (homme) と子どもともつかない」「人間 (これらの箇所においては、ルソーは、「子ども」を homme 「人間」に含めていない。つまり、ルソーは、「子ども」を、「大人」の反対概念ではなく、「人間」の反対概念としたのである。

先に挙げた『エミール』の「序」の一文の homme を「人間」とすると次のようになる。

人は子どもというものを知らない。子どもについてまちがった観念をもっているのだから、議論を進めれば進めるほど迷路には入りこむ。このうえなく賢明な人々でさえ、人間 (homme) が知らなければならないことに熱中して、子どもにはなにが学べるかを考えない。かれらは子どものうちに人間 (homme) をもともめ、人間 (homme) になるまえに子どもがどういものであるかを考えない。

これが、『エミール』に書かれた幼児教育についての要旨である。この文を読むと、従来の理解とは、ずいぶん異なったルソーの「子どもの発見」がみえてくる。ルソーは、「子ども」を「人間」になる前の存在ととらえていたのである。

ルソーは、「人間 (homme) が生まれるあらゆるところ」のように、ある時は「人間」のなかに「子ども」を含めながらも、また、ある時は「人間 (homme) にくらべたばあいの子ども」といって「子どもは人間でない」としている。無論、ルソーは生物学的に「子どもは人間である」ことは分かっていた。では、なぜ、ルソーは、「子どもは人間でない」とし、「子ども」を「人間」になる前の存在としたのだろうか。そして、ルソーにとって「人間」は何を意味しているのだろうか。

ルソーによって「発見」されたという「子ども」とは、「子ども」と「自然」を一つのものとしてとらえ、それを「人間」や「文明」と対比させることによって導き出された概念である。ルソーは『エミール』(1762)に先立つ『人間不平等起源論』(1755)において「すべての現存の諸民族のなかで今日まで自然状態をもっともよく保存している民族であるカライブ人」(ルソー, 1933 (1755) p.78) という。ルソーの「子どもの発見」を考察するためには、ルソーが生きた 18 世

紀中頃のフランスに至る「カライブ (カニバル)」をめぐる認識の経緯をたどる必要がある。「カライブ (カニバル)」とは、コロンブスが報告したカリブ海小アンティル諸島の「人食い人種」のことである。ルソーの「子どもの発見」には、コロンブスの「発見」(1492)以来、「人食い人種」とされていたカリブ海小アンティルの先住民カリブ人が深く関係しているのだ。

## 〇おわりに

ルソーは、16 世紀のモンテーニュや 17 世紀のカリブ海小アンティル諸島の博物誌に依拠しながら、「自然」「野蛮」「未開」「人食い人種」「高貴な野生人」といった概念を巧みに操作しながら、自らの議論を展開し、「人間とはなにか」の考察をすすめた。本稿は、ルソーの教育論『エミール』を読み解くための序説として、一旦ここで留め置くこととし、ルソーの「子どもの発見」が、ルソーのいかなる「まなざし」のもとにおこなわれたのか、稿をあらためて検討する所存である。

## 文献

- 富田晃「ヨーロッパの鏡像、カリブとカニバル：17世紀フランス人宣教師テルトル神父の博物誌をめぐる」『思想』岩波書店, 1153, 2020
- ハラリ, ユヴァル・ノア『サピエンス全史 (上・下) 文明の構造と人類の幸福』(柴田裕之訳) 河出書房新社, 2018 (2011)
- ルソー, ジャン・ジャック『学問芸術論』(前川貞次郎訳) 岩波文庫, 1968 (1750)
- ルソー, ジャン・ジャック『人間不平等起源論』(本田喜代治, 平岡昇訳) 岩波文庫, 1933 (1755)
- ルソー, ジャン・ジャック『社会契約論』岩波文庫, 1954 (1762)
- ルソー, ジャン・ジャック『エミール』上・中・下 (今野一雄訳) 岩波文庫, 1962, 1963, 1964 (1762)

(2020. 12. 21 受理)